

【第9回日本語ジェンダー学会シンポジウム】

ジェンダーの視点から『源氏物語を考える』  
源氏物語の成立順序と紫式部の心的変化

(日本語ジェンダー学会 第九回年次大会 )

佐々木瑞枝 (武蔵野大学・大学院教授)

シンポジウムの発表に際し、大野晋先生より「源氏物語 玉鬘系、若紫系」についていろいろお考えを伺う機会がありました。

大野晋先生のご冥福をお祈りします。



2007年10月25日 椿山荘にて 大野晋先生の88歳の誕生日をお祝いして

## ジェンダーの視点から『源氏物語を考える』 源氏物語の成立順序と紫式部の心的変化

(日本語ジェンダー学会 第九回年次大会)  
武蔵野大学大学院 佐々木瑞枝

『源氏物語』54巻は現在並べられている順序で書かれたものだろうか。

- 江戸時代の初期までは、33巻まで二つの系統の物語が存在していたことは先行文献からも明らかである。
- 二つの物語「若紫系」と「玉鬘系」の違いは何か。
- なぜ、二つの物語が存在したのか。
- 二つの物語は作者紫式部の中での心的変化によるものではないか。
- 藤原道長と紫式部の「恋」から、この二つの物語の謎を解けないだろうか。

## 源氏物語1000年の根拠

### 『紫式部日記』<sup>1008年11月1日によれば</sup>

敦成親王誕生50日目のお祝いに

藤原公任が紫式部を訪ね「あなかしこ、このわたりこ、わかむらさきやさぶらふ」と、うかがひたまふ。

- ・源氏物語の「若紫」が既に読まれていた。
- ・古典には濁点がないことから「我が紫」とも解釈できる。

## 『源氏物語』の二つの系列と背後にあるジェンダー観をめぐって

- 「源氏物語」は二つの系列の物語りである。
- その理由 「桐壺」に続く「帚木」の内容は読者には「唐突」と感じられる部分が多く含まれる。
- 本居宣長 「源氏物語玉の小櫛」第五巻
- 「帚木(ははきぎ)」には「かかる好きごと」とあるが第一帖の「桐壺」にはそのようなことが記されていない。また「語り伝へけむ」とあり、これから後のことを書こうとしている。(問題点はこの部分のみ)
- 光る源氏、名のみことごとしう、**いい消たれ給ふ咎おおかんなる**に...
- いとど、**かかる**好きごとどもを末の世にも聞き伝えて(帚木の冒頭部の一部)

## 帚木の巻 冒頭が含む問題

### ● 和辻哲郎(大正11年)

桐壺の巻では、藤壺を慕い、葵の上は好きになれなかった源氏が、帚木の巻で突然「好色人(すきびと)」として登場するのは不自然である

- 青柳秋生(大正二十年代)若紫の巻を中心に考察
- 武田宗俊(昭和25年)「源氏物語の最初の形態」『文学』(昭和25年6月7月)

本居宣長以来、源氏物語54巻の順序はこの順序で書き進められたと信じられてきたが研究の結果、次のような見解に達した。

- A 源氏物語33巻までのはじめの部分は「紫の上系」と「玉鬘系」に分類される。  
紫の上系 1, 5, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 17, 18, 19, 20, 21, 32, 33、
- B 玉鬘系 2, 3, 6, 15, 16, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31  
Bは順次書かれて、Aに挟み込まれた。

## 54帖

### 帖名

1.桐壺 2.帚木 3.空蟬 4.夕顔 5.若紫 6.末摘花  
7.紅葉賀 8.花宴 9.葵 10.賢木 11.花散里 12.須磨  
13.明石 14.漣標 15.蓬生 16.関谷 17.絵合 18.松  
風 19.薄雲 20.朝顔(槿) 21.少女 22.玉鬘 23.初  
音 24.胡蝶 25.螢 26.常夏 27.篝火 28.野分  
29.行幸 30.藤袴 31.真木柱 32.梅枝 33.藤裏葉  
34.若菜上 35.下 36.柏木 37.横笛 38.鈴虫 39.夕霧  
40.御法 41.幻(雲隠) 42.匂宮 43.紅梅 44.竹河  
45.橋姫 46.椎本 47.総角 48.早蕨 49.宿木 50.東  
屋 51.浮舟 52.蜻蛉 53.手習 54.夢浮橋

### 桐壺の巻と帚木の巻

■なぜ、「紫の上系」に「玉鬘系」がはさみこまれたと言えるのか。

- 桐壺の巻と帚木の巻の語り口の極端な違い
- 内容の不連続
- 「桐壺の巻では、12歳以降のことは語られていない。我々の知るところでは光君はいかなる意味でも好色の人ではない。しかし、突如として有名な好色人(好き日と)光源氏の名が(帚木の巻)に出てくるのは何ゆえであろうか。

和辻哲郎

「もし、現在のままの源氏物語を一つの全体として鑑賞せよと言われるならば、自分はこれを傑作と呼ぶに躊躇する」

## 若紫を中心に初めの部分の分析

### ❁ 青柳秋生の分類

「若紫グループ」(若紫、紅葉賀、花宴、葵、賢木、明石、霽標、絵合、少女)  
「常木グループ」(常木、空蟬、夕顔、末摘花、蓬生、関屋、玉鬘、初音) 13  
人の登場人物

常木グループは若紫グループの後に執筆されている。  
その理由—若紫グループに登場する人物は常木グループにも登場するが、  
その逆はない。

## 武田宗俊の論考

- ❁ 第一部 桐壺から藤裏葉まで
- ❁ 第二部 若紫から幻まで
- ❁ 第三部 匂宮から終わりまで

第一部は二つに分けて若紫系、玉鬘系とした。

「玉鬘系は若紫系を前提とし、若紫系は玉鬘系に影を落とす」  
「玉鬘系で生じた種子が若紫系に戻って活動することはない」

若紫系17巻こそ、最初に書かれた「源氏物語」である。  
時の流れにも無理がない。

## 若紫系は致富譚という主題を持つ

### ❁ 大野晋『古典を読む―源氏物語』岩波書店同時代ライブラリー

- ❁ 「若紫系」は致富譚という主題を基本的に持っている。結局は「めでたしめでたし」で終わる話として作者に構想されたからである。
- ❁ 光源氏の行動を見ると、光源氏にも藤壺にも罪障意識が極めて弱い、欠けている。
- ❁ 「若紫系を書く段階で作者には二人の男に会う女(藤壺)の迷い、惑い、苦しみ、打ち消さなくてはと思う後から追ってくる欲求、喜び、そうした狭間に引き込まれている女のさまを、ありありと書くことは正に不可能だったのだ」

## 玉鬘系は「失敗に終わる挿話」である

- ❁ 若紫系は既に文学好きの人たちに読まれていて好評だった。それを受けて帚木の巻では、これからはじめる「玉鬘系」がまったく異質の物語を始める予告とも読み取れる。
- ❁ 「若紫系」では光源氏は完全無欠の扱いを受け、賞賛されすぎている。
- ❁ →読者からの非難が作者の耳に届いていたとも考えられる。
- ❁ 「帚木」の巻の前半は「雨夜の品定め」で男性から見た女性総論があり、その後、空蝉、夕顔、末摘花、玉鬘(夕顔の娘)が登場するが、全て「光源氏の失敗に終わる挿話」という共通点を持つ

玉鬘系全体が喜劇仕立てとも受け取られ、光源氏に対してシニカルなタッチで描かれている。

中世・近世初頭には若紫系「本系」、  
玉鬘系「並び」とされていた

- ❖ 「源氏釈」(平安末)
- ❖ 「源氏物語奥入」(鎌倉時代)では、  
本系と並びとされていた。
- ・ 鎌倉時代になると現存する54巻がその順序  
で読まれている。(阿仏尼)

## 紫式部日記から

(源氏物語 二つの系統を見る上で)

- ❖ 紫式部 27歳の時に藤原宣孝と結婚、1001年、結婚後3年で夫の疫病のため、死別(女兒一人)
- ❖ 藤原道長999年我が子12歳の彰子の中宮とし、優れた才能のある女性を彰子の身邊に集めた。紫式部はその中の一人である。
- ・ 紫式部日記には藤原道長に関する記述が多くある。  
「すき物と名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思う」  
(すっぱくて、おいしいものと知られているから、梅を見る人が折らずに過ぎることはないだろう)  
「人にまだ、折られぬものを誰かこの好きものぞとは口ならしけむ」  
(まだ誰にも折られたりしない梅なのに、食べなれてすっぱくておいしい梅などということが何でできましょう)  
道長は紫式部を「好き物」と揶揄し、現実には紫式部の部屋の戸を叩いている。

## 道長に対する描写の変化

- 「殿のうちそへて仏念じここえ給ふほどの頼もしく」(中宮彰子の安産を待望する道長の念仏の声に信頼の念を持って頼もしく聞いている作者。
- 「はづかしげなるにわが朝がおの思ひしらるれば」(道長の様子が立派でまともにめをあわせ難い、自分は寝起きの顔であるし)中宮彰子の出産の前、庭のおみなえしを折って、道長が紫式部に見せた折に。
- 「このわたりに若紫やさぶらふ」藤原公任(才人であり、道長は彼を快く思っていない)ー皇子誕生の五十日のお祝い、道長の嫉妬
- 道長は息子の結婚について、彼女に打ち明けた。「そなたの心よせある人とおぼして語らはせ給ふもまことの心のうちは思ひいたることおおかり」、紫式部は道長の頼みを拒否、(お話があったけれども、私の心のうちでは色々考えることもあった)
- 10月16日「かねて聞かでねたきこと多かり」(前もって何もきかされないでいまましい)紫式部は「前もって何もきかされない」で皇子付の役職が決定された。

## 前半一道長に対する好意 後半一道長に対する恐怖・嫌悪

- 若紫グループ 中宮彰子のもとへの出仕前に書かれた
  - 玉鬘グループ 紫式部が中宮彰子のもとに出仕した後に書かれたのではないか。  
「雨夜の品定め」で始まる宮廷の官人たちの一般的風土の記述  
玉鬘(光源氏40歳、次第に成長する玉鬘に親の位置にありながら怪しい振る舞いをする)など
- 「現在の源氏学界では概してA型(若紫グループ)、B型(玉鬘グループ)の分離そのものを見ようとしない。あるいはその分離について無理に別の解釈を与えようとする傾きがある。それでは『源氏物語』を正當に理解することはできない」 大野晋 1996年



## 参考文献

- 『紫式部日記全注釈』萩谷朴 角川書店
- 『源氏物語の研究』森岡常夫 弘文堂館
- 『源氏物語の構造』藤村潔 櫻楓社
- 「源氏物語について」和辻哲郎(『思想』1922年11月号)
- 『古典を読む一源氏物語』大野晋 岩波書店
- 「源氏物語の成立順序についての一考察」山中裕(『国語と国文学』1955年3月号)
- 「源氏物語の最初の形態」武田宗俊(『文学』昭和25年6月7月)